

# 地域のつながりの再構築をめざして — コミュニティ、アート、インクルージョン —

椋野 美智子

男性が稼いで妻子を養い、忠実な社員を家族ぐるみで会社が守る、20世紀工業社会モデルは崩れた。雇用は不安定化し、女性の就業が増え共働きが中心になるとともに、離婚によるひとり親家庭、単身世帯も増える。世界に共通するこのような職場、家族の変化の中で、地域の重要性が増している。しかし、求められているのは、かつて農村社会にあった同質ゆえのつながりの強さではない。21世紀型の地域は、多様性を前提とし、異質なものを包摂（インクルージョン）した強靭さが必要なのだ。

多様な人々の参加、包摂を促す上で、今、アートの果たす役割が注目されている。大分大学が実施した地域住民による創作ダンスのワークショップでは、参加者の間に初対面にかかわらず性や年齢や障害の有無を超えたコミュニケーションとそれに基づく信頼感の萌芽が見られた。別府市では、シャッター通り化した商店街をアートにより再生する試みで、高齢の店主と若い人たちが驚きと共感でつながった。英国ブライトンで行うアートフェスティバルでは、目的に最高水準のアートの提供とコミュニティの活性化を並べて掲げ、貧困・荒廃地区の人々をフェスティバルへの参加を通して地域に包摂することをめざしている。他にも創造的人材の育成、創造産業の創出等の効果に着目して、英国ではアートによる地域再生に大規模な投資が行われた。

一方、近年全国に増えているコミュニティカフェは、多くが個人や非営利団体の自発的な意思で開設され、地域の団体や個人と連携協力しながら地域の居場所、交流の場として運営されている。対象を限定しない開かれた場所であること、多様な活動、特にギャラリーやコンサート、教室などの参加型アート活動を柔軟に展開していることが多様な人々の参加とその間でのつながりの形成と深まりを促している。

これらの活動に共通するキーワードは柔軟、多様、寛容、驚き、共感。21世紀型コミュニティづくりに向けた様々な試みが世界各地で始まっている。



## PROFILE

むくのみちこ：大分県生まれ。東大法学部卒業後、1978年厚生省に入る。1998年版厚生白書「少子社会を考える一子どもを産み育てることに『夢』を持てる社会を」を責任執筆。内閣府参事官（高齢社会対策担当）、厚生労働省社会・援護局総務課長などを歴任。2006年、大分大学福祉科学研究センター教授に就任。現在、社会保障の制度研究と、高齢化が進む地域の福祉向上と活性化の研究を推進。福祉に関する大分県等の各種審議会委員。